

ガタガタ通信

No.49

2012・新春の号

発行
NPO法人
水辺に遊ぶ会
大分県中津市中央町2-8-35
mizube1999@yahoo.co.jp



2012年、今年も水辺に遊ぶ会は 中津干潟で元気に遊ぶのだ。

▼さてさて、新しい年を迎えて、うれしいニュースが2個も飛び込んできました。
日本ユネスコ協会連盟第3回未来遺産プロジェクトに水辺に遊ぶ会の活動「生きもの元気、子どもも元気、漁師さんも元気な中津干潟保全プロジェクト」が登録された。
そして、国土交通省の手づくり郷土賞を、これまで水辺に遊ぶ会の「山国川発中津干潟 水でつながる自然と文化と私たち」が受賞したのである。
えっ？そんな行事に参加したことないって？あ、「私たちこんな活動してます」ってのを見た目よさげに言葉にしたのが「生きもの元気、子どもも元気、漁師さんも元気な中津干潟保全プロジェクト」(「生きもの」が「いっばい」で子どもが遊べて漁師さんも魚が捕れる干潟を守るよ)と「山国川発中津干潟 水でつながる自然と文化と私たち」(「耶馬溪と山国川と中津干潟はつながっていて、その水のつながりを大事にしながらか活動しなくちゃね」なんだな)。
▼さて、ユネスコの未来遺産のコンセプトは「100年後の子もたちに優れた地域の文化や自然を残していくましよう」ということなのだとか。100年後...いくら元気な怪しいガタガタ調査隊でも、隊長筆頭に、隊員みんな影も形も残っていない。うーんうーん。

▼話変わって、ガタガタ通信にも良く登場する「ボウガキ遺跡」。この中津市の小高い丘に位置する縄文時代の遺跡からは、大量の貝が出土している。そう、貝塚だ。ここから見つかる貝は、大量のハマグリ、ウミナナに混じってアサリ、オキシジミ、アカニシ、カワナナ、それからスズキにマダイにチヌにエイ、そしてイノシシ。3500年前の縄文中津人の食卓って私たちがとあんまりかわらないかも。と思ったのは隊長だけだろうか？
遙か昔の中津人たちも、貝掘りに海辺にでかけ、その傍らで子どもたちは遠浅の干潟を走り回り、カニを追いかけてたりハチガメを触ったりしていたんだらう。3500年の間には地球が暖かくなったり冷たくなったりして、陸地が増えたり減ったり、海の水も増えたり減ったり、時には汚くなったりして、それでも今も変わらない干潟の自然がここに広がっている。

▼3500年間脈々と変わらずにきた中津の干潟の自然を、それから、山国川の豊かな水のつながりを、私たちは100年後の子もたちに伝えることができるだろうか？
100年後の子もたちが、1000年後の子もたちが、干潟でどろんこになってカニやハチガメを追いかけたり、漁師さんが捕った美味しい魚を食べられる未来は、私たちの肩にかかっているのである。
さあどうする？水辺に遊ぶ会、責任重大な2012年の新春なのだ。もちろん、これを読んでるみなさんは、一緒に頑張ってくださいませ。



■活動報告(2011.10.1~2011.12.31)

- 10.1 日田市立博物館海の学習講師 読売新聞取材対応
- 10.7 大分の海を守り育てる討論会出席 東北に送る漁船の清掃作業
- 10.8 東北に送る漁船の塗装・整備
- 10.9 カニ籠漁体験・取材 海苔種付け加勢
- 10.11 釜石東漁協に向け漁船出発式 沖代小学校4年生ササヒビ体験
- 10.13 南部小学校4年生ササヒビ体験 環境省中央環境審議会瀬戸内海部会企画専門委員会出席 J-WAVE出演
- 10.14 平日屋間小さなお料理教室開催
- 10.23 大新田他測量調査
- 10.27 ごみゼロ大分県民会議出席
- 10.28 海の町ネット打ち合わせ
- 10.29 神奈川海岸美化財団海ごみシンポジウムパネリスト
- 10.30 山国川源流観察会雨のため中止
- 11.7 三保小学校4年生干潟観察会講師
- 11.8 東九州龍谷高校1年生海の学習講師 中津干潟視察来客案内
- 11.13 山国川冬鳥観察会
- 11.18 中津市環境標語・ポスターコンテスト審査
- 11.22 ユネスコ未来遺産ヒアリング
- 11.24 大分県男女共同参画審議会出席 NPO協働事業についてヒアリング
- 11.25 中津干潟視察来客案内
- 11.27 中津市社協ふくしまつり参加
- 11.30 瀬戸内海環境保全協会広島県衛生団体研修会講師
- 12.2~4 大分県職員NPO職場体験研修受入
- 12.3 海ごみ学習会開催
- 12.4 大新田海岸清掃・漂着物調査
- 12.5 大新田魚類他船上調査
- 12.7 平日屋間小さなお料理教室開催
- 12.9 中津港環境懇談会出席
- 12.14 中津南高校1年生郷土の学習講師
- 12.19 環境省中央環境審議会瀬戸内海部会企画専門委員会出席
- 12.20 北部九州河川利用協会助成報告 海の町ネット打ち合わせ
- 12.21~22 中津干潟視察来客案内
- 12.26 ユネスコ未来遺産登録決定プレスリリース



上半期の行事予定です。
詳細は郵送されるチラシを見てね。

伝言板

- 2月26日(日)お魚ホネホネ教室(要予約です)
 - 3月18日(日)三百間浜ビーチクリーン
 - 4月21日(土)13:00~春の干潟観察会
 - 6月2日(土)山国川を調べてみよう
 - 6月10日(日)大新田ビーチクリーン
 - 7月21日(土)14:00~夏休み干潟観察会
 - 7月31日(火)19:00~アカテガ二産卵観察会
- ★囲い刺し網体験漁もやりますよー。

お知らせとお願い

★引き続き東北への支援物資を探しています。
・漁船(エンジンが付いていて動くもの)
・小型の発電機とチェーンソー(港や船の上での作業に使用) お心当たりのある方は事務局までご一報ください。

ボランティアスタッフを募集しています。

日頃体力をもてあましてるので干潟調査のかせいならしてやってもいいぞと思う方、力はないけど調査結果をパソコンに入力するならできるわという方、子ども好きだから行事でお世話してみたいけど勇気がないという方、弁当ばっか食べてかわいそうだからおにぎりでもにぎってやるかと思ってる方、HP更新してないじゃんと思ってる方、ガタガタ通信半分は折るならできるぞという方、リジュー大変そうなので事務仕事手伝ってやるうかという方、なんにもできないけど元気なのがとりえなのという方、是非！ 漁師さんのお手伝いをしてみたい、という方も是非！

昔の海の写真募集中 ササヒビ・浜遠足・貝掘りなど
昔の海の写真を探しています

ホームページ営業中！ 遊びに来てね!!

ホームページ→<http://www.max.hi-ho.ne.jp/y-ashikaga/>

建物のない博物館 水辺に遊ぶ会ミュージアム(別館もあるよ)
→<http://www.geocities.jp/kabunykun/index.html>

電脳濁濁通信→<http://blog.livedoor.jp/mizube1999/>

電脳濁濁通信Twitterも始めました！「mizube1999」で検索してね！

おさかなブログ→<http://ameblo.jp/nakatsu-osakana/>

海のまちなつと→<http://blog.livedoor.jp/mizube1999-umimachi/>

事務局へのお問い合わせはメールで→mizube1999@yahoo.co.jp

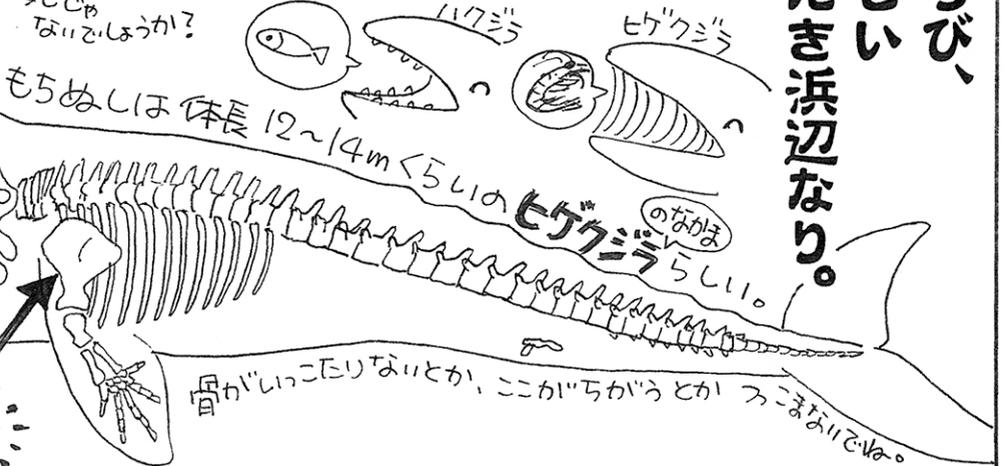
へんしゅうこうき

■私たちの活動をたくさん応援してくれたジイジが、年末に亡くなりました。謹んでご冥福をお祈りします。アサリをもう一度掘ろうねと言う約束が果たせないままなのがとても心残りですが、いつか中津干潟にアサリが戻る日を夢見て、今年も干潟を守る活動を頑張っていきたいと思ひます。(う)

古松多く立ちならび、つづく白州が美しい 龍王の浜はめでたき浜辺なり。

▼中津市龍王町に閻無浜神社というのがある。我が「水辺に遊ぶ会漁師さんず」(勝手に命名)の日常会話で良く登場するお宮である。夏のお祇園さんの時はもちろん、2月には漁師さんたちが集まって、境内の恵比寿宮にお参りをするのだそうだ。この地は、半世紀ほど前までは白砂青松の海岸だったそうなので、まさに海に臨む神様なのだ。

ついでに、怪しい干潟探検隊長「中津干潟がずっと豊かでありましたよ、干潟の生きものも干潟に関わる人たちもシブワセでありますよ」とお祈りすべく、この閻無浜神社にふらり立ち寄ったとき、社殿の奥の上の方にフシギな物体を発見したのである。



アッシー干潟教授 閻無浜神社を調べる

▼閻無浜神社について調べてみた。閻無浜神社は明治5年(1872年)まで豊日別(とよひわけ)国魂神社という名称だったそう。豊日別というのは、どうやら古事記以前の北九州から宇佐までのことらしい。祭神の豊日別国魂神は、豊国の国魂、すなわち国土の霊を守る神様、産土の神様である。

▼閻無浜神社には豊日別国魂神のほかに瀬織津姫(せおりつひめ)神も祭られている。瀬織津姫神は、もともと「海」を祭祀発祥の原郷とする神様で、航海守護の神徳を兼ね備えていたようである。漁師町にぴったりな神様だ。この神様が龍に姿を変えて現れたという話も残っているが、閻無浜の地名の「龍王」はここから由来したのかもしれない。それにしても、この瀬織津姫神は謎多き神様である。全国に瀬織津姫を祭る神社は多数存在するが、多くは封印されて別の神様の名前が表に出ているといわれている。なぜ瀬織津姫が封印されたかについて推論を始めたら、それだけで通信終わってしまいそう。とにかく閻無浜神社の起源は古そうだとわかった。

▼ちなみに閻無浜海峽より向こうの福岡県は白日別(しろひわけ)と呼んでいたらしい。この白日別の由来には諸説あり、「白(しろ)」という文字は「しらす」、つまり「治める、統治する」の意味で九州を統治する国という説があったり、「ス羅(しろ)」であり新羅からの別れを意味するといふ説であったりである。だったら豊日別の「豊」にはどういう意味が込められているのか気になるところである。

▼ということで、レポートは次号に続くのである。たぶん。 豊日別の「豊」にはどういう意味が込められているのか気になるところである。

東北 on my mind byモトマロ隊員

水辺に遊ぶ会は持続可能でゆるやかな被災地支援を会員のみなさんと考えていきたいと思っています。

12月1日(木)
●18:32中津発の特急に乗りました。りじちよが見送りにきてくれて少し照れくさい。豊橋で降りるんですよ!と言い渡されて、うー、豊橋なんて知らんところやん、私を引き受けてくれるTさん(豊橋、表浜でウミガメ保護活動をしているご夫婦)もどんな人か分からんしと愚痴ると、夜中に冬山登山みたいな格好をしている人なんかいないから、目立って直ぐ分かります。と明快なお答え。

●22:30豊橋駅西口にて待つことしばし。後部に湯たんぽとぬいぐるみが詰まったダンボール箱でぎっしりのワゴンがやって来た。手を振り合せて、即合流。「このまま北上します、次は飯田でYさんを拾います」。闇夜を走るレンタカー。飯田って長野じゃん、昼間なら景色が見えて最高だろうな。

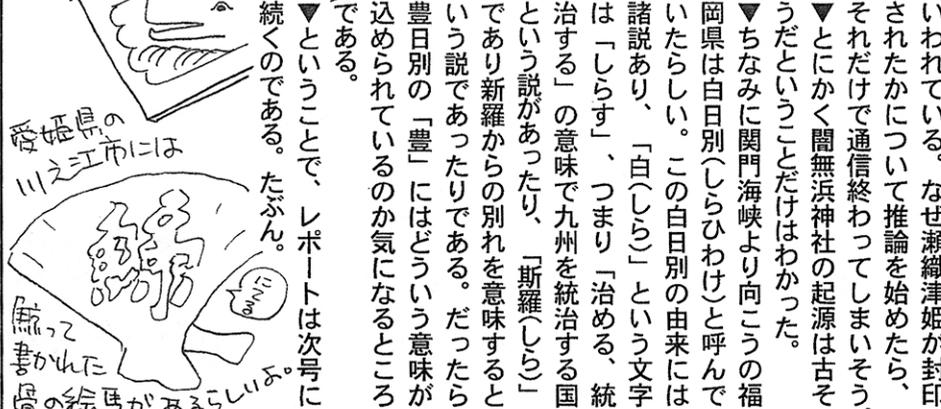
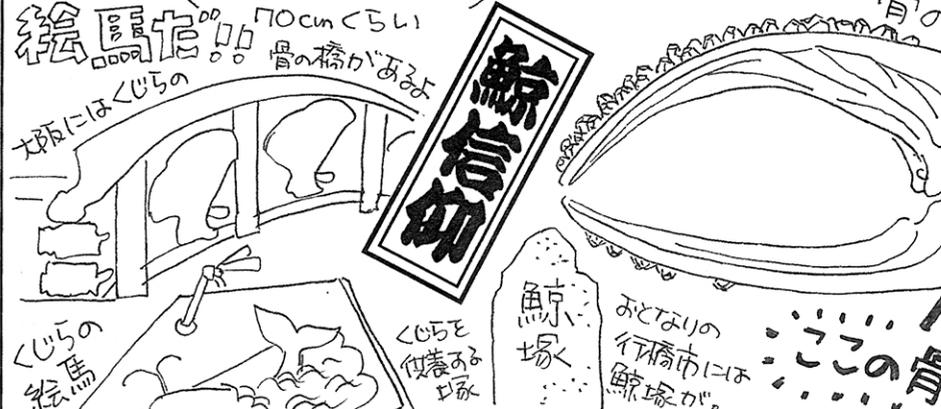
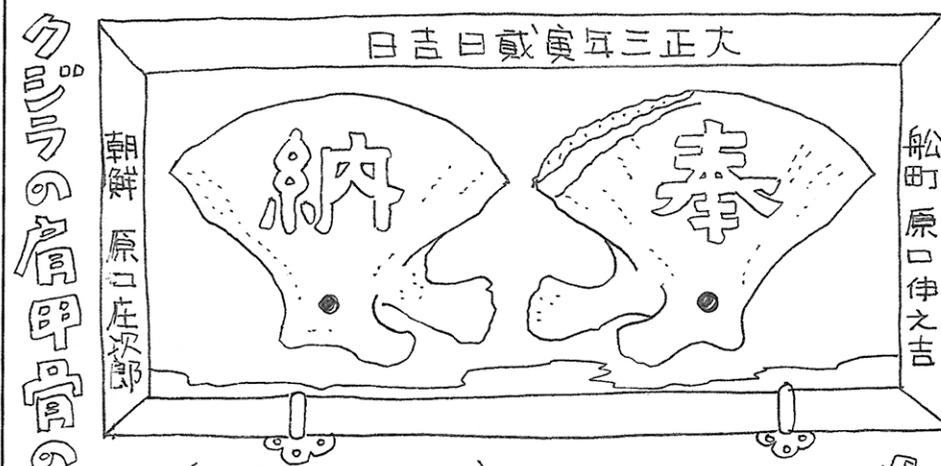
●25:00絵画教室という看板があるお宅に寄ると、そこが怪しいアーティストYさんの自宅。ここで再度湯たんぽを積み込むけれど、もう入りません。バラして隙間に突っ込む。どうやらこのTさんとYさんはサーフィン仲間だそうで、Yさんはもう何度も被災地で支援活動をしたそうです。

闇夜を走る車は塩尻、松本、上越...私はひたすら睡眠して体力温存を図る。それから一体どこを走ったのでしょうか、ひたすらハイウェイが続く。日本という国の背骨は実はハイウェイと山脈なのか。目の前の光景はただ一本の道、その上をころがっていくパーチャル模擬運転のようです。

12月2日(金)

●8:00「警梯山、撮れました」と、M子さんが映像を見せてくれて、会津若松にいたことがわかった。会津若松といえば維新の舞台の一つ。ならぬことになりませぬの藩主松平容保だっけ。ちょっと気になりつつ眠気に浸っていると、「福島に入りましたあ」と一言。東北自動車道で宮城を抜ければ目指す岩手県釜石市。日本は広いなあと嘆息しつつ運転する両氏。そりゃそうよね、縦断してるんだもんねえ。M子さんと私は釜石行動を控えて、睡眠を取りまくるのみ。種山高原を通る時、なんだか聞いたことがある名前だと感じていたら、BSの宮沢賢治特集番組に出てきた場所だった。あ、岩手なり。サービスエリアで洗顔したらなんとお湯と石鹸水まで出てきた。ここで「アメニモマケズキャラメル」を買ってしよう。 「岩手県釜石に入りました。このまま田老地区に行つて見学します」

モトマロさん、いよいよ東北被災地に入ります。...がこの続きは次号のガタガタ通信で。



被災地支援グッズ 取り扱ってます。

つなぐ日本!

車のステッカー ¥1000

お風呂のバスケット ¥500

2017.3.17

Rebirth East Japan

4巻は 子どもの 被災地支援 物資の回収処理に役立ちます。

中津近郊の雨乞い 「中津・三保村史蹟散歩」より抜粋 佐藤正義著(昭和52年10月発行 叢文社)

③雨乞い芝居 大正末期のことである。大旱魃で畑作は枯死寸前、犬丸川は濁水でカラカラ、七月に入ったのに田植も出来ぬ始末。憂慮した黒川、田中、草場の三部落の人達は協議の上、黒川部落の鎮守社貴船宮下の犬丸川の河原に小屋掛けをして、北原の人形芝居を興行した。

この雨乞い芝居の芸題は源平布引滝八陣肥後本城、菅原伝授手習鑑等で、源平布引滝は文字通り水に縁があり、八陣肥後本城は加藤清正の大蛇退治で格闘の場面に暴風雨がおこるところがある。菅原伝授手習鑑は松王丸が菅原丞の子秀才の首実検の愁嘆場で、松王丸の独白に「互藤次が墨絵の雲、雨を降らせしためしあり」と言つたりがある。

いずれも水に縁がある芝居である。この芝居はなかなかの盛況で三日間連続興行されたが、芝居打ちあげの翌朝雷雨があり、僅か二時間ばかりで田圃が満水になり、植付けをすませることができた。

④千駄焚き 中津・下毛地方では、千駄焚きのことを千把藁と呼んでいる。千把の藁つまり多くの藁を焚いたのである。明治、大正時代には再三、千把焚きを行ったが、八面山の麓の部落では、大勢の農民が手に手に藁を持って登山、シヨウケの鼻の頂上にこれを積み上げ、夕刻になって点火した。夜空をこがす壯観は、かなり遠方からでも望まれた。この地方の農民達は、千把焚きのことを「雲の腹こがし」とも言っていた。(おわり)